

## 批評と紹介

### 近年台湾の敦煌研究文献三種

「敦煌論集」「敦煌變文用韻考」

「敦煌變文述論」等——

金岡 照光

#### 一、

ここ数年来、台湾において刊行せられたる敦煌関係の論著を瞩目し得ることが多くなつた。中華人民共和国の成立以後、中国本土において、多くの敦煌関係の論考が公刊されたことは、ここに詳言を要しない。特に王重民氏他「敦煌變文集」上・下（一九五七、人民文学出版社）の刊行は、依るべき覆刻底本のきわめて乏しかつた斯学にはじめて信頼しうるテキストを提供したという点において、画期的なアルバイトであつたと評し得る。また王重民氏等「敦煌遺書総目索引」（一九六二・商務印書館）は、ペキン文書のみならず、スタイン・ペリオ文書をふくみ、その他の散在せる文献にも及んで（レニングラード文献はふくまない）、陳垣氏の「敦煌劫余録」（一九三二・北京）、ジャイルズ（J. Giles）氏の

批評と紹介 金岡

「Descriptive catalogue of Chinese manuscripts from Tun-huang in the British Museum」（一九五七・London）と相補つて、現在のところ、もつとも依るべき目録の一つに数えることができよう。もちろんその記載は必ずしも、すべての文献に及んでいるわけではなく、またその個々の文献の命名、解題に至つては、今後の全面的な補訂を要するものではあるけれども、現在のところでは、上記二書とならんで、ペキン本、ペリオ本、スタイン本に関する、依るべき目録の一つといわなければならない。

また蔣礼鴻氏の「敦煌變文字義通釈」（一九六〇、増訂版・上海）は、従来ほとんど斧鉞を加えることの稀であつた、敦煌文学文献の解読、語注に挑戦した野心的な労作として、きわめて高い価値をもつものであつた。

如上の三書以外にも一九四九年の人民共和国成立以後に刊行せられた敦煌関係の中国本土における論著は、枚挙に遑がない。しかしながら、文化大革命以後の中国においては、これらの諸研究がいかに評価、批判され、いかなる新しい研究の方向が開拓されたか、それらについて窺知できる資料や、情報は、現在のところほとんど入手できない。少くとも、現時点においては、中国では、こうした諸研究は緊急の課題としてとりあげられている動向は見られず、いずれ學術研究体制すべてにわたる変革と歩を同じくして、新しい行き方が提

起せられるものと、予想する他はない。

特に文化大革命における人民共和國の傾向を意識したわけではあるまいが、近年台湾において、敦煌研究の文献が数種、かなりやつぎばやに刊行せられたことは、注目を惹くものがある。もつとも文化大革命の時期より以前に公刊された論著もかなりあつたが、量的にも質的にも、現在ほど充実したものとはいえなかつたようである。

たとえば一九六一年刊行せられたる「敦煌変文」上・下（楊家駱主編・中国學術名著・俗文學叢刊第一集第二冊第三冊、世界書局）のごときは、書名、編者名こそ異なるが、前掲王重民氏他六氏の手になる「敦煌変文集」上下（人民文学出版社、一九五七）と全くことなるところのないものであつた。それは引言、校記、叙例、目錄、本文、注記に至るまで、一言一句のちがひもなく、頁数もすべて一致し、ただ引言において「敦煌変文集」が、「本書の編集経過について」（引言六頁～八頁）述べたところを、「敦煌変文」は「本書の編集と校勘については、詳しくは叙例にあり、ここでは贅言しない」としてある部分がことなるのみである。かかる不徳義的な盗印が何故に行われたのか、両土の政治関係を念頭においても、世界書局本の行為は絶対に認容できるものではなく、読者、研究者を愚弄すること甚しきものであるといわざるを得ない。

このような学問の世界で、あり得べからざる傾向は、最近の研究動向においては見られない。少くとも、王重民氏の名や、著書を直接援引することを避けていたような傾向は、きわめて少くなつたといえる。しかしなおかつ中華人民共和国における多くの研究業績は、台湾における論考では不問に付されることが多い。これは資料入手という要因にもとづくものか、国際関係を反映せる取捨の結果かは明らかでないが、台湾における斯学の研究に、一つの限界となつてゐることは否み得ぬ事実である。悲しむべき事実ではあるが、これは単なる學術交流の次元を超えた、より広範かつ緊要の問題として、研究者が自覚しなければならぬことであらう。

## 二、

近年入手せる敦煌関係の諸著より左の三点をえらんで、簡単に紹介しておきたい。

- 1 蘇瑩輝「敦煌論集」（一九六九・台湾学生書局）
- 2 羅宗濤「敦煌变文用韻考」（一九六九・衆人出版社）
- 3 邱鎮京「敦煌变文述論」（一九七〇・台湾商務印書館、人人文庫）

以上三点の他に、雑誌掲載論文もいくつか挙げることはできるが、とりあえず紙幅の関係もあり、以下順を追つて、こ

の三書の素描をこころみることとしたい。

1 蘇瑩輝「敦煌論集」一九六九年刊・台湾学生書局発行。

華文四五頁、英文八〇頁

蘇瑩輝教授の名は、日本の敦煌研究者にとつて、すでになじみの深いものである。氏は現在マレーシア、クアラルンプールの馬來亞大学中文系の教授に在任中と聞く。曾ては台湾において国立中央図書館特蔵部門、とくに金石拓片管理主任の任にあつたこともあり、台湾移住前には敦煌芸術研究所の研究員として張大千氏らとともに、文物壁画の研究に従事していたといわれる。台湾における敦煌研究の第一人者といふべき地位にあつた。すでに一九六四年「敦煌学概要」(中華叢書編審委員会)を公刊し、敦煌の地理、敦煌写本、瓜州沙州の地史、千仏洞の壁画、彫塑等について概論を試みたこともある。この「敦煌学概要」が、敦煌学についてのガイド・ブック、入門的概説の役割を果したものであつたのに対し、本書はかなり専門的な論文集の体裁をとっているものである。一おう本書の構成を挙げれば左のとおりである。

本書は一、通論、二、専論、三、書評の三部にわかれ、さらに英文として、I. The mystery about the discovery of manuscripts in the Tunhuang stone cave はじめ六編のサマリーを収録しているが、これは華文中からの論文を摘出したものである。

一、通論は「國際漢学界与敦煌学」「談敦煌学」「敦煌学与圖書館学」「北平圖書館敦煌学」「敦煌発現藏経之謎」「敦煌学在日本」「我如何写「敦煌学概要」」の七篇にわかれる。

いずれも一九六〇年前後に発表されたものである。「國際漢学界与敦煌学」の一文において、氏は、台湾(中華民国)における敦煌学の現状を述べた部分は、従来比較的明らかにされなかつた台湾の研究の概況を伝えて興味が深い。とくに敦煌文献資料について、台湾の各文教機関所蔵のわずかな印刷物を除いては、民国四十七年(一九五八)中央研究院歷史語言研究所が我が東洋文庫に依頼して購入せるブリティッシュ・ミュージアムのマイクロ・フィルム焼附製本が、台北県南港鎮の当該研究所に保管されているのが、その主なるものであると述べているのは、台湾にもかなりの敦煌原写本が保存されているのではないかという臆説をかなり明らかに否定している。(壁画は国立歷史博物館が一九五六年羅吉眉、胡克敏二氏によつて、複製されたものが、台北市の同館の敦煌壁画室に保存されている由)、もちろん台湾でただこのマイクロ・フィルム製本のみが、唯一の敦煌文献資料として存在しているのではないことは、「談敦煌学」という一文において「(内)国内現存敦煌卷軸概況」の項を設け、簡明に報告されているところからも判明する。その中で台湾に関係あるものとしては、「国立中央圖書館に民国三十七年(一九四八)冬に

北京から運び出した六百余箱の北京図書館善本図書中に敦煌写本一五三巻があり、六朝から五代宋初に至る經典写本がその大部分である」ものが保存されているという。これは蘇瑩輝教授の言によつても、葉退庵の手によつて李盛鐸旧藏本を購入したものであることが判明する。そしてその具体的な内容は、潘重規氏が「国立中央圖書館所藏敦煌卷子題記」（新亞學報第八卷第二期、一九六八、八）として公刊せる一五〇巻余の写本の解題目録によつて明瞭となる。潘重規氏もその前文において、中日戦終了前後に李木齋（盛鐸）の藏本を葉蒼虎（退庵）が購入したものであることを述べている。蘇教授の言によれば、中央研究院歷史語言研究所に、前記スタイン本マイクロ・フィルム製本が保存されている他に「さらに少数の敦煌写本（唐五代写本と宋初の藏文經典）」があり、また国立歴史博物館に一九六四年に入れた敦煌写本二十余巻（とくに中唐写本）が保存されているというが、それらの具体的な目録を、併せ載せてもらいたかつたと思う。また私家藏として現在台湾にあるものは、蘇教授の言によれば五氏の所蔵若干というが、これもまた併せて、その目録を公刊されることを望みたい。

その他本書に収められた多くの論文の一つ一つについて、今詳述する余裕はないが、そのいくつかの問題点を指摘しておこう。「敦煌学在日本」なる一文は、中国、欧米の諸々の

研究文献を通じ、紹介されることの稀であつた日本の敦煌研究の概観であり、その意味では貴重な紹介ともいえるが、必ずしも重要なものを網羅しているとはいえず、入手できたもののみを散発的に紹介した感がある。たとえば仁井田博士の「唐宋法律文書の研究」（一九三七）は欠け、「支那身分法史」を載録するといつた、平均を失っている面があることは否定できない。また小説関係の研究紹介が狩野直喜博士の「芸文」（七巻一—三号、一九一六）の論文一点のみを挙げているのも、他の分野と比して、やや簡に過ぎるものといわざるをえない。同様のことは「輾近中日学者関於敦煌学之著述」にもいいうる。即ち、中国の学者の業績にしても、かなり載録すべくして、されてないものが多く、総体的にいつて、文学関係に薄い点が目立つ。ただ従来台湾の研究者があえて挙げなかつた、中国本土の研究業績（たとえば「敦煌变文集」）等を率直に挙げている態度は、好感がもてる。

他の専論の部の諸論文についての詳述は省略するが、その主たる研究の方向は、1 壁画関係（「敦煌壁画石窟発現对中国絵画之影響」等三編）2 敦煌の地史関係（「論唐時敦煌陪蕃的年代」等九篇）3 敦煌文書の文献考証関係（「北魏写本孝経残葉補校記」等一篇）の三部門にわたつてゐるが、今後さらに本邦における豊富な研究成果を十分参照され、さらにその研究を深化発展していただきたいものと思う。他に勞

幹「敦煌芸術」巴宙「敦煌韻文集」の二書の書評を収める。いずれにせよ、蘇教授のこの論文集は、台湾の現在の敦煌研究の一般的水準や、研究の方向の一端を示すものとして、興味ある問題を提起しているといえよう。

### 三、

2 羅宗濤編著「敦煌變文用韻考」（衆人出版社）三〇五頁  
敦煌韻文学の押韻に関する研究は、過去から現在に至るまで、その数は余り多くない。かつて、本邦においても、坂井健一氏の敦煌變文押韻字についての論考が公刊された由であるが、筆者は未見のため、その内容を紹介することはできない。また孫楷第氏は、その労作「唐代俗講軌範与基本之体裁」（俗講、説話与白話小説）所収 一九五〇）において、いわゆる「講經文」に注記せられたる「吟上下」「古吟上下」「平側」「側吟」等の語に関連して、講經文の押韻字若干についての論考を発表されたことがあった。また目下部文夫、三根谷徹、平山久雄諸氏等の敦煌本切韻断簡を中心とする韻母の研究も数点公刊されており、胡竹安「敦煌變文中的双音連詞」（中国語文、一〇、一一合訂号 一九六一）、邵榮芬「敦煌俗文学中的別字異文和唐代西北方言」（中国語文二二四、一九六三）等の音韻論上の論考もある。

しかしながら、羅氏のこの研究は、変文押韻字の統計的調

査としては、少くとも従来囑目し得た範囲で、もつとも精細で網羅的である。本書の構成は、引言につづき、平声、上声および去声、入声の三編において、それぞれに属する押韻字を列挙し、さらに余論と附録「敦煌曲韻譜」を併載したものである。

「引言」において羅氏は、変文が大眾の文学であつた旨を、従来の定説を使用して述べてから、本書が王重民氏の「敦煌變文集」を底本として用いた旨明記し、その採用せる理由として「材料が豊富である」こと、「世界書局の翻印によつて、入手が容易である」ことの二つの理由を挙げている。前述の世界書局本「敦煌變文」が王氏の「敦煌變文集」の翻印である旨明瞭に述べているのは、良心的な態度として、好感を持つことができる。同氏はさらに変文のテキストの成立写記の年代について一括して述べているが、それは主として先学の研究成果と、写本記載の年代、干支を基礎とせるもので、現在の段階においては、無理のない控え目の推定といえる。同様のことは地域の推定にもいえるが、要するに、その下限は宋初、上限は早くも太宗以後とし、地域は一つの例外を除いて西北地域としている。これらはもちろん前人未発の議論ではないが、変文の成立発生になお多くの未開拓の分野がある現在では、こうした文献原資料の範囲に限定した推論が、むしろ手固く危うげのないものといえよう。而

して、羅氏は、変文中の用韻法の分析の結果こそ、こうした問題にもう一つの確実な推定根拠を与えるものと述べており、本書の目標の一つとするところも、まさにこうした点にあつたものと思われる。(なお附言すれば、用韻の分析のみならず、口語々彙、句法の調査を、これに附け加える必要があるう。)

羅氏は以上の前提にもとずき、「変文集」中、韻式のほぼ系統的にたどれるもの六十一篇をとりあげて、その押韻字を分類整理している。平上去入の別に応じ、韻字を小項目にたてそれぞれ各テキストごとに、韻文中の押韻字を反切を注記して列記して、さらに各声の章の末尾において、それぞれの押韻体系を総括した「説明」を附している。そしてその部分において「特殊情形之説明」として、一般中古音の通押体系を以ては律し切れぬ押韻字を挙げている。たとえば平声の条において、「醜女縁起」に、奇、斯、儀、皮、成が通押し、児、並、誰が通押している例をとりあげ、支清同用、支脂迥同用がきわめて稀な例であることを指摘し、同様の例が、敦煌曲子の「蘇莫遮」「謁金門」等にもあらわれていることを以て、この現象が、唐五代西北方言にもとづくものと推定しているが如きである。

こうした特殊押韻を果して、すべて唐五代の西北方言現象として理解すべきか否かは、なお大いに検討を要するところ

であり、羅氏も引言において述べている如く、1当時の語音の反映、2押韻の意図なき場合、3誤写、4校勘の誤り、5排印の誤り等のものもろの要素が考えられる。このうちもつとも基本的な手続きとして、先ずなされなければならないのは、主として、4、5に關すること、スタイン本、ペリオ本の原写本(そのマイクロ・フィルム本)との厳密なる校合である。羅氏の底本とせる「敦煌變文集」は、きわめて良心的なる覆刻本ではあるが、それでもなおかなり多くの誤校、誤印のあることは、蔣礼鴻教授、入矢義高教授等の夙に指摘するところである。本書が「変文集」を底本としていることは、現在の段階でもつとも依る可き覆録本を求めたものとして妥当な処置だつたと思われるが、現在すでにスタイン、ペリオ両本の影印は、かなり広範に可見の機会が与えられているのであるから、なお一層綿密な原写本との校合が要求される。とくにかかる変則押韻の検討に當つては、原写本誤記の校勘をも含めて、慎重すぎるほど慎重であつてよいように思われる。その点本書がとくにペリオ本について、原写本との校合を一層深化させて頂くことを望みたい。

本書の分類集計せる押韻字一つ一つを検討することは、なお今後音韻専門家の方々の手を俟たなければならないが、とくにその変則押韻は、中古音韻の体系に補訂を加える上からもとくに重要である。羅氏の苦心になるこの豊富な統計的資料

は、その意味で、今後の音韻研究者の検討のための、よき問題提起の材料を提供しているものといえよう。

#### 四、

### 3 邱鎮京「敦煌變文述論」(台灣商務印書館・人文文庫一 三三五・一三二六)一三八頁。

本書は小冊子ではあるが「変文」の概観ともいえるべきもので、従来の諸学説がきわめて手ぎわよくまとめられ、変文の概要を一瞥するのに適当なものといえる。内容は一、総論として、敦煌文書の発見経過、変文の起源、俗講との関係、変相との関係、変文の名称と意義、成立年代推定の六節を設け、二、変文の内容及び種類として、仏教故事変文、史伝故事変文、其他の三節で論じ、三、変文の体裁と構造として、体例、散文部分、韻文部分、韻散両文の混合形式、其他の五節に分ち、四、変文の価値および影響、変文の後世文学に対する影響の二節を掲げている。

その論するところの多くは、鄭振鐸、孫楷第、王重民、向達等の多くの諸先学の論じたるところを吸収消化している部分が多いが、なおいくつかの問題の提起が併せ行われている。

たとえば「変文の起源」において、鳩摩羅什訳の大莊嚴論經卷第一の文をひき、その種の經典の韻文、散文混合の形式

が、変文の来源に若干の關係をもつものではないかと指摘している。変文の形式の来源をインドに求めんとするのは、古くは鄭振鐸氏の所説(挿図本中国文学史)にもあるが、この文と偈の形式が、果して変文の形式と具体的に如何に結びつくかは、なお未だ明らかにされていない点が多い。邱氏は、さらに六朝以来の転読、梵唄、唱導が変文のごとき講唱文学に発展したという、孫楷第氏以来の通説をも挙げているが、もしさらに一步をすすめて、藏經を誦誦した講經文の実態、講經文からさらにフレキシブルな形に展開した変文講唱の姿等とを、これに関連づけたとしたら、さらに説得力のあるものになつていたであらう。

同様に「変文と俗講の關係」を論ずる場合も、邱氏は、従来しばしば論ぜられていた「入唐求法巡礼行記」、「通鑑」唐紀五十九、「因話錄」等々の記事を挙げて、こうした俗講が変文の舞台であることを述べているが、長安における俗講と、敦煌におけるそれとが果して一致するものであるか否かは、なお十分慎重でなければならず、少くとも円仁見聞に係る俗講が、変文の演出舞台であつたと即断することは、やや早計のきらいがある。(拙稿「文淑法師再論」東洋学研究三)俗講自身が、演芸化するには、少くとも長安の奉勅俗講から、かなり大きな変転のプロセスを経たものと考えなければならず、その間の距離を無視することは危険である。

変文と変相の關係についても、邱氏の論は、「歴代名画記」その他に見られる「変相」の名称と変文を並挙して、それによつて両者に關係ありとされているようだが、すでに本邦で、秋山光和、梅津次郎教授らが絵画史の面から、フランスのニコラ女史 (V. Nicolas) が「降魔変画巻本」という物的証拠により、また沢田瑞穂、小川環樹、川口久雄の諸先学をはじめ本邦の敦煌文学の研究者の多くが、変文中の字句と絵画の存在を結びつける作業という面から、数々の証左を提出している如く、この変相変文の關係は、かなり明らかにされている。こうした現今の変文研究の成果が邱氏の著書に、なお十分結実していないうらみのあることは否定できない。もつとも人文庫という、かなり量的に制約されたものだから、十分こうしたままでの研究成果を生かし切っていないのは、ある意味では当然かも知れないが、今後は、さらにこうした世界各国の研究成果をとり入れて、論評をして頂きたいものと考えらる。

すでに紙数も尽きているので、二章以下について十分触れる余裕がなくなつたが、老大な資料を、きわめて手ぎわよく整理した点は敬服するものであるが、左の諸点について、一層の御発展を望みたいと思う。

(1) 「敦煌変文集」中の覆録上のミスが、そのまま採録されている点がかなり目立つ。やはり原写本影印との校合が今

後さらに必要とされよう。

(2) 鄭振鐸氏所蔵といわれる「仏本生経变文」は、「敦煌变文集」にも未収であるが、邱氏はその影印図版を挙げておられる(六五ページ)。かかる従来その全貌が十分明らかにされていなかった写本については、その所在、覆録、校勘、分析を十分にスペースをとつて行つていただきたいと思う。

(3) 体裁の分析についての希望を一つだけ挙げれば、幸いにして前掲羅氏の如き研究者もおられるのであるから、押韻その他韻律上の問題についても、一応の成果をとり入れるようにお願いしたい。また敦煌曲子詞、白話詩等多くの敦煌文学の雑多な形式についても、一言論及しておく必要があつたのではないかと思う。

(4) 内容の評価についても、「新文体の開拓」「伝説の拡大」「口語の表記」等を高い価値あるものとして挙げておられ、それ自体については異論はないが、個々の文献の内容、言語について、十分論じ尽していないうらみがある。これらについても中国文学の立場から入矢教授はじめ多くの業績が世に問われているし、仏教説話の上から岩本裕教授の新説等も提起されているのであるから、そうしたものの消化はさしたる困難はない筈であるし、またそこからさらに発展をこころみることも可能であろう。また言語の問題につ



いても、邱氏は六種の口語表記の実例を挙げているが、これらはすでに蔣礼鴻氏の「敦煌変文字義通釈」が行った白話語彙の調査や、入矢教授の「敦煌変文集口語々彙索引」中の語彙の一部分にすぎない。そうした点にも、やや簡略にすぎるくらいのあることは否定できない。

以上要するに邱氏のこの書は、従来の変文研究の成果の一部を、かなり圧縮し、概論、入門的に巧みに整理したものとして、その大要を知るには簡便であるが、記述や実証、举例が、ともにやや簡略にすぎる点、最近の斯学の成果（とくに本邦、欧米の）が、十分とり入れられていない点、原写本の校合、解読の成果が十分示されていない点等に若干の不満が残る。もちろん本書の形態分量からいって、これらはやや望蜀のきらいはあるかも知れないが、専刊論文として、今後さらに拡大されることを期待するが故に、敢えて過大の望みを述べさせて頂いた。

台湾近年における敦煌学の業績三点について、その内容を簡単に紹介して見た。本稿は単なる素描にすぎないので、それぞれの分野における專家各位が、一層その細密な分析を行われるための素材を提供することによつて、与えられた責を果たさせて頂いた次第である。

(一九七二、六、二五)

栗林宣夫 著

## 里甲制の研究

山根幸夫

本書は、著者が「あとがき」でことわつておられるように、東京教育大学に提出された学位論文（昭和四十三年一月に学位授与）を公刊されたものである。筆者は、栗林氏と同様、明代史を専攻している関係上、同氏とは随分古いおつきあいになるが、同氏は二年前立正女子大学教授に就任されるまでは、長らく高等学校の教員、或いは中学校長として随分多忙な職務に従事してこられた。その間、春・夏の休暇や週一回の研究日を利用して、贅々として研究をつづけてこられたことは、全く敬服の至りである。同氏の研究成果がこのような形でまとまり、学界に提示されたことは誠によろしい次第である。

著者は、従来里甲制に関連した研究として、次のような諸論文を発表してこられた（発表年代順）。

里甲銀に関する考察（東洋史学論集二）一九五四

明代老人考（東洋史学論集三）一九五四

明代後期の農村と里甲制（東洋史学論集四）一九五五

明代の里甲制（歴史教育三十八）一九五五